

時間的展望 (Temporal Perspective) が向社会的行動に与える影響

嶋野重行*・菅原正和**・大浪瑠夏***

(2003年3月20日受理)

Shigeyuki SHIMANO, Masakazu SUGAWARA and Ruka OHNAMI

The Influence of Temporal Perspective on the Prosocial Behavior

序

数年前に、酔って駅のホームから転落した人を助けようとして日本人カメラマンと韓国人の青年留学生が線路に飛び降り、ホームに引き上げようとしたが間に合わず、3人とも亡くなるという痛ましい事故があった。カメラマンは新進気鋭で将来が有望視されていたし、留学生も将来は、日本と韓国の橋渡しをする仕事につきたいという希望に燃える明るい青年だった。これは、毎日ある多くの事件の一つではあるが、何故か我々の心に妙に残った。この2人の青年は、救助活動や特別な任務について行動している人間ではなく、毎日の生活を普通に送っている私たちと同じ一般市民である。

通勤の途中、信号が黄から赤に変わりかけている交差点をお年寄りがおぼつかない足取りで渡ろうとしているのを見かねて、手をつないで一緒に渡ってあげたり、切符自動販売機の使い方が解らなくて困っている人をみて操作を代わりにやってあげる、といった類いの通常の社会的親切行動を、社会心理学者は“向社会的行動 (prosocial behavior)”と呼んできた。最近の国際比較研究 (中里ら, 1997) における、中国、日本、韓国、トルコ、米国の5カ国の若者の行動比較研究では、わが国は最下位になっており、もはや“親切な日本人”は残念ながら過去のものとなった感がある。

ところで、“prosocial behavior”とよく似た概念 (Eisenberg and Fabes, 1997) に“altruistic behavior”がある (Rushton, 1984 ; Batson, 1991)。区別しないで使用している研究者もいるが、後者は因子構造が異なり、ときとしてきわめて高いリスクを伴うことがあるので我々は区別した方がよいと考えている。

集団的いじめをうけているクラスメイトを、純粋な正義感から救出しようとする生徒の行動もまた危険と高いリスクを伴ない通常の親切行動とは異なる。青年期の自我形成における“prosocial behavior”のとりやすさ (またはとりにくさ) に影響を与えている発達の要因は何であろうか。その要因は多数存在する。

自我発達過程における時間的展望 (temporal perspective) の課題獲得が、現代日本の青年において十分に発達していないという指摘がある。本調査研究では、投影法を用いた青年期の時間的展望が向社会的行動や社会的スキル (social skill) にどう影響しているかを検討する。

I 問題と目的

我々は過去の経験から学んだことや現在抱えている問題をもとに行動し、また未来に対して如何なる目的をもっているかということに影響されながら行動を形成していく。そして、自己の価値体系や置かれている環境、パーソナリティなどに影響されながら、過去・現在・未来というそれぞれの時間を統合し、様々な事象を思考し意思決定している。行動の基底には時間的展望 (temporal perspective) が存在する。時間的展望とは、将来の目標や過去の事象と関連させて現在を捉えようとする心理的な機制、即ち時間に関する見通しや見解の総体のことである。時間的展望の概念を早い時期に提唱したのは L. K. Frank や K. Levin (1951) で、彼らは現在の人間の行動は文化的に決定された時間性 (temporality) に関する態度や、過去と未来間の力動的な相互作用によって影響を受け、決定づけられることを主張した。そして時間的展望を場の理論における生活空間 (lifes pace) の要素の一つとしてとらえ、個人の生活空間は現在だけでなく過去や未来も含んでおり、個人の時間的展望とモラルとの間には密接な関連があることを示した。

時間的展望に関する研究は、更に白井 (1991, 1994), Nurmi (1992), 都筑 (1999), 嶋野ら (2001) などによって行われ、白井は時間的信念と展望に関する尺度を、Nurmi は発達的变化を、都筑は目標意識と自我同一性地位との関係を明らかにしている。時間的展望を獲得することは、青年期の自我の重要な発達課題であるが、現代日本の青年はこの課題達成が未発達であるという指摘がある (NHK 調査部, 1991)。

本研究では、T. J. Cottle (1976) の時間的展望の投影法 (projective method) を用いて青年期にある学生が、どのような時間的展望を獲得し、それが他者に対する支援行動を含む向社会的行動や社会的スキルにどのような影響を与えているかについて分析検討した。

II 方法

<調査対象> 国立A大学生130名, 県立B短期大学生17名, 福祉系専門学校生28名, 合計175名。

<調査時期> 2000年9~10月。

<材料と手続き>

- ① T. J. Cottle's Circle Test: 手続きとしてのインストラクション—所定の用紙に「過去・現在・未来がそれぞれの円で表されると仮定して、あなた自身の過去・現在・未来について、あなたが感じていることを最もよく表すように3つの円を描いてください。描き方は自由です。違う大きさの円を描いてもかまいません。円を重ねて表現してもかまいません。描き終わったら、それぞれの円に過去・現在・未来のどの円を表しているものなのかを表示してください。あまり考え込まずに思いのまま感じたとおりに描いてください」と教示した。
- ② 愛他的行動尺度: J. P. Rushton (1984) の Self-report Altruism Scale の20項目を因子分析しなおし、一部変更して使用。5件法で回答を求めた (尺度項目については Appendix 1 参照)。
- ③ 向社会的行動尺度 (大学生版): 菊池 (1998) の20項目を因子分析しなおし一部変更して使用。5件法で回答を求めた (尺度項目については Appendix 2 参照)。
- ④ 社会的スキル尺度 (青年版): 菊池の Kiss 18 (1994) を因子分析しなおし一部変更して使用。5件法で回答を求めた (尺度項目については Appendix 3 参照)。

Ⅲ 分析と結果

(1) サークルテストと愛他的行動尺度, 向社会的行動, 社会的スキル尺度の関連

① 時間的優位性の分析

時間的優位性は, 未来・現在・過去を表す3つの円の大きさからみて, どの時間を重視しているのかをみるものである。大きい円に注目する「時間的優位性」を採用した。整理の仕方として, 円が1番大きい時に4点, 次に大きい時に2点, 1番小さい時に0点を与える。その場合, 1つの円が大きく, 他の2つの円の大きさが同じ場合には大きい円に4点を与え, 他の円を0点とした。また, 2つの円が同じ大きさの場合は2点を与え, 小さい円を0点とした。さらに3つの円が同じ大きさの場合は全てを0点とした。サークルテストの過去・現在・未来を表す3つの円の大きさから, どの時間を重視しているか分析した。円の大きさによって, 過去優位性, 現在優位性, 未来優位性, その他の4分類とした。円の大きさを点数化した形で表すと [過去・現在・未来] の順に [0・2・2], [0・0・0], [2・2・0], [2・0・2] である。この場合それぞれ次のような群として分類可能となる。

過去優位群	[4・0・0], [4・2・0], [4・0・2]
現在優位群	[0・4・0], [2・4・0], [0・4・2]
未来優位群	[0・2・4], [2・0・4], [0・0・4]
その他	[0・2・2], [0・0・0], [2・2・0], [2・0・2]

その結果を, Table 1 に示す。青年期の特徴である未来優位性が全体の48%を占めている。

Table 1

	人数 (%)	愛他行動	向 社 会	社会スキル
過去優位群	25 (15)	41.760	48.600	53.167
現在優位群	33 (19)	44.156	60.161**	57.300
未来優位群	82 (48)	42.427	54.852*	58.695*
その他	32 (19)	42.094	50.281	56.000
全 体	172 (100)	42.624	53.988	57.200

各群と愛他行動, 向社会的行動, 社会的スキルの分散分析を行った結果, 愛他行動に有意差は認められなかったが, 向社会的行動において有意差が認められた (F=.369, df=3/167)。そして, PLSD法による多重比較の結果, 現在優位群の平均は, 過去優位群の平均より高く (p<.01), 未来優位群とその他の群の平均より高かった (p<.05)。また, 未来優位群の平均は過去優位群の平均より高く (p<.05), 同様に, 社会的スキルも分散分析後に多重比較をした結果, 未来優位群の平均は過去優位群の平均より高かった (p<.05)。

② 時間的関連性の分析

時間的関連性は、過去と現在、現在と未来、未来と過去の3つの関係を見るものである。円が Fig. 1a のように接していれば2点, Fig. 1b のように一部が重なっていたら4点, Fig. 1c のように全く重なっていれば6点をそれぞれに与える。全ての得点を合計し、得点を0点から18点の間とし、過去・現在・未来の円の接触状態によって、円が全く接触していない場合T・A群(0点)、接しているが重なっていない場合T・C群(2点~6点)、それ以外の部分的に重なる場合T・I群(8点~18点)の3分類とした。

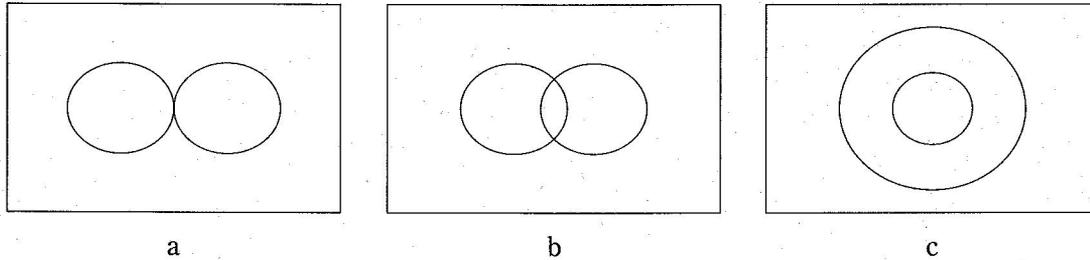


Fig. 1

その結果、T・I群が51%で約半数を占めた (Table 2)。

Table 2

	人数 (%)	愛他行動	向 社 会	社会スキル
T・A群	44 (26)	40.302	50.268	57.690
T・C群	40 (23)	42.725	54.900	59.132
T・I群	88 (51)	43.648	55.398*	56.023
全 体	172 (100)	42.624	53.988	57.200

各群と愛他行動, 向社会的行動, 社会的スキルの分散分析を行った結果, 愛他行動と社会的スキルにおいては有意差は認められなかったが, 向社会的行動において有意差が認められた ($F=3.65$, $df=2/168$)。同様に多重比較の結果, T・I群の平均が, T・A群の平均より高かった ($p<.05$)。

③ 時間的展開性

時間的展開性。型として, 未来と過去の円の大きさを比較し, 過去を表す円が未来を表す円よりも大きい場合を「過去優位展開」とし, 逆に未来を表す円が過去を表す円よりも大きい場合を「未来優位展開」とする。この2つのいずれにも分類しないものを, 円の大きさで得点化した形で [過去・現在・未来] の順に表し, 過去と未来の円の比較で過去優位展開群, 未来優位展開群, その他3群 (過去=現在=未来, 過去=未来<現在, 現在<過去=未来) の5分類で分析した (Table 3)。

Table 3

	人数 (%)	愛他行動	向 社 会	社会スキル
過去優位展開群	38 (22)	41.541	49.289	52.912
未来優位展開群	102 (59)	42.039	54.710	58.539**
過 = 現 = 未群	18 (10)	45.944	57.111	57.778
過 = 未 < 現群	11 (6)	46.545	63.700*	58.100
現 < 過 = 未群	3 (2)	39.667	41.000	51.000
全 体	172 (100)	42.624	53.988	57.200

未来優位展開群が59%で青年期の一般的特徴を示した。分散分析を行った結果、愛他行動に有意差は認められず、向社会的行動において有意差が認められた ($F=4.051$, $df=4/164$)。多重比較の結果、過 = 未 < 現群の平均は、未来優位群の平均より高く ($p<.05$)。また、現 < 過 = 未群の平均よりさらに高かった ($p<.01$)。社会的スキルでは、未来優位群の平均が過去有意群より有意に高かった ($p<.01$)。

時間的展開性「型」では、現在重視として、現在の円の大・中・小群の3分類で分析したが、特に群による有意差は見られなかった。

(2) 時間的展望尺度とサークルテストの関連

時間的展望尺度の得点と Circle Test における時間的優位性、時間的劣位性、時間的関連性、時間的展開性 I 型、時間的展開性 II 型によって分類した群との関連をみるため、Circle Test の各分野で分けた群を独立変数とし、時間的展望尺度の得点を従属変数として分散分析を行った。その結果、時間的展望性 II 型で分類した群間において有意な関係が認められた ($F=2.735$, $df=2/167$, $p<.01$)。さらに、時間的展望性 II 型の大・中・小の3群で多重比較を行ったところ、中群の平均が小群の平均より有意に高かった。これ以外の群間では有意差が見られなかった。

(3) 愛他的行動と向社会的行動との関連

愛他的行動尺度と向社会的行動尺度には、.694 ($p<.01$) の高い相関があった。

IV 考 察

日本の現代青年においても、T. J. Cotle の Circle Test による時間的優位性の分析から、未来を最も重視する者がほぼ半数存在することが示された。また、最も過去を軽視し、過去・現在・未来の関連性を強く捉え、未来志向であることが分かった。

時間的展望が愛他的行動に与える影響については、ほとんどないことが示された。しかし、本研究で愛他的行動を測るものとして用いた愛他的行動尺度 (Rushton, 1984) にある質問項目の中には国における文化の違いから、日本の現代青年が日常生活において想定しにくい場面が数項目あったことを指摘しておきたい。そのために、時間的展望から愛他的行動に対して目立った特徴を説明できなかった。しかし、愛他的行動尺度と向社会的行動尺度の間に正の相関が見られたことから、愛他行動尺度で測ったものと向社会的行動尺度で測ったものを全く区別してとらえるよりも、この両尺度が親切行動とか思いやり行動とよばれる行動全般について測っていると考えたほうがよいだろう。

時間的展望が向社会的行動に与える影響については、現在を重視し、過去・現在・未来のそれぞれの領域を統合して捉える者ほど、困っている人を思いやり、助けようとする傾向が示された。また、過去と未来を同程度で意識し、それらと比較し特に現在に重きを置いている者が、最も向社会的行動が形成されやすいことが明らかになった。さらに、未来を一番軽視している者より、全ての時間を同じように捉えている者、過去指向の者よりは未来志向の者が向社会的行動を形成しやすいことが明らかになった。

時間的展望と社会的スキルとの関係については、過去を軽視して未来を重視し、過去から未来へと時間的な志向性を示す者が最も高い社会的スキルを獲得していることが示された。

将来に希望や目標をもち、将来への見通しを立てられている者は、さまざまな状況に対応でき、人とのコミュニケーションがうまくとれ、積極的に人とかかわっていけることが示唆される。注目すべき現象として、向社会的行動を最も形成しやすいと考えられる群において、社会的スキルが際立って高くはならないということである。未来志向はときとして競争社会においては、愛他行動とは結びつかず、社会的スキルの所謂「スキル」と関連性を高めている可能性がある。

Appendix 1

-
1. 見知らぬ人のクルマを雪の中から出すのを手伝った。
 2. 見知らぬ人に道を教えた。
 3. 見知らぬ人にお金をくずしてあげた。
 4. 赤い羽根や緑の羽根などの募金に応じた。
 5. 見知らぬ人にお金をあげた。
 6. 慈善事業に品物や衣類を寄付した（福祉団体などに）。
 7. ボランティアの仕事をした。
 8. 献血をした。
 9. 見知らぬ人の持ち物（本や荷物など）を持ってあげた。
 10. 見知らぬ人にエレベーターのドアをおさえて先に乗せてあげた。
 11. 列に並んでいて（コピー、スーパーなどで）他人に順番をゆずった。
 12. 見知らぬ人をクルマで拾ってあげた。
 13. (銀行やスーパーなどで) 店員がお金をまちがえたときに、自分に有利な場合にもそれを正してあげた。
 14. あまり親しくない隣人に大切なもの（皿とか道具など）を貸した。
 15. 「慈善事業」のクリスマスカードをその趣旨を知っていてすすんで買った。
 16. 自分の方がよく知っている場合にはあまり親しくない友人でも宿題を手伝ってあげた。
 17. 近所の人の宅配物やペットや子供をただで預かった。
 18. 障害者やお年寄りが道を横切るのを手伝った。
 19. バスや列車で立っている人に席をゆずった。
 20. 知り合いの引越しを手伝った。
-

Appendix 2

1. 列に並んでいて、急いでいる人のために順番をゆずる。
2. お店で、渡されたおつりが多いとき、注意してあげる。
3. 転んだ子どもを起こしてあげる。
4. あまり親しくない友人にもノートを貸す。
5. 気持ちの悪くなった友人を、保健室などにつれていく。
6. 友人のレポート作成や宿題を手伝う。
7. 列車などで相席になったお年寄りの話し相手になる。
8. 気持ちの落ち込んだ友人にデンワしたり、手紙を出したりする。
9. 何か探している人には、こちらから声をかける。
10. バスや列車で立っている人に席をゆずる。
11. 酒に酔った友人の世話をする。
12. 雨降りのとき、あまり親しくない友人でもカサに入れてあげる。
13. 授業を休んだ友人のために、プリントをもらう。
14. 家族の誕生日や母の日などに家にデンワをしたりプレゼントしたりする。
15. 見知らぬ人がハンカチなどを落としたとき、教えてあげる。
16. 知らない人に頼まれてシャッターを押してあげる。
17. バスや列車で、荷物を網棚にのせてあげる。
18. 知らない人が落として散らばった荷物を、いっしょに集めてあげる。
19. けが人や急病人が出たとき介抱したり救急車を呼んだりする。
20. 自動販売機や切符売機などの使い方を教えてあげる。

Appendix 3

1. 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか
3. 他人を助けることを、上手にやれますか
4. 相手が怒っているとき、うまくなだめることができますか
5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか
6. まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか
7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく対処できますか
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか
9. 仕事をするときに、何をどうやったらいいか決められますか
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか
12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか

15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか
16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか
17. まわりの人たちが自分とは違った考えをしていますが、うまくやっていけますか
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか

References

- 1) Batson, C. D. : The Altruism Question. Lawrence Erlbaum Associates. 1991.
- 2) Cottle, T. J. : Perceiving Time. John Wiley & Sons, New York, 1976.
- 3) Eisenberg, N. and Fabes, R. A. : Prosocial Development. In W. Damon (Ed.) : Handbook of Child Psychology, John Wiley & Sons, New York, 1997, 701-778.
- 4) 菊池彰夫：また/思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル。川島書店，1998.
- 5) 菊池彰夫，堀毛一也：社会的スキルの心理学。川島書店，1994.
- 6) Levin, K. : Field Theory and Social Science. Harper, 1951.
- 7) 中里至正，松井洋（編）異質な日本の若者たち。ブレーン出版，1997.
- 8) NHK調査部（編）現代中学生・高校生の生活と意識。明治図書，1991.
- 9) Nurmi, J-E. : Age differences in adult life goals, concerns, and temporal extension : A life course approach to future-oriented motivation. International Journal of Behavioral Development, 1992, 15, 487-508.
- 10) Rushton, J. P. : The altruistic personality. In E. Staub, et al. (Eds.) : Development and Maintenance of Prosocial Behavior, Plenum Press, 1984, 271-290.
- 11) 嶋野重行，菅原正和，大浪瑠夏：大学生における時間的展望が愛他行動形成に与える影響。日本応用心理学会第68大会発表論文集，2001，p99.
- 12) 白井利明：青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連。心理学研究，1991，62，260-263.
- 13) 白井利明：時間的展望尺度の作成に関する研究。心理学研究，1994，65，54-60.
- 14) 都筑学：大学生の時間的展望。中央大学出版部，1999.